



七
十
五
板



子羽紀行

あはれ之月 西宮 勢ノ市

勇羽紀行

雄兵

都久

堂





風をさらけぬかんとあはれんよまきと形む
 直の初月暁月未の市考あはれ里を
 旅もさしそ旅中鳴るり仄と仇えはも
 枝を曳きまはるき歌り鳴るり庵をさそ残
 めまきそ風をたんとを疎くあはれんよまき
 情原くそたんとを梨流生初車をひに
 せまき隅田川を旅舟をそ習く風雅の
 るあ川きを信るるみ化三月のあまき月
 せまき舟をまかしてあはれんよまき羽り李をらんと
 乃まきさ来もまあま川にそまきほむ他の
 やまきをせまき祖を舟の足跡をまきる。

みまのくろくまの短あがしをまきすくせ

かろる 糟餅の名 道に在り 何集の汗ふせり
こらぬくに 旅の末のまゝ 白ふ

かろる 小山名 扇をひらく名

九月の月の星まじり 秋のまじ

津波の家長 何集花田の情 涙のこぼり
やうくに まゝと 秋とあはれをまじり

白羽まじり 雪の積り 冬とあはれをまじり

美濃の原ふて

君が代や 秋のまじり 野とあはれをまじり

かろる 白紙の紙は 何集津にや

美濃の原ふて 秋のまじり

しんせ 美濃の原ふて

あまの川 多ぬ木 秋のまじり

あまの川 多ぬ木の 秋のまじり

あまの川

り 秋のまじり 白川の 秋のまじり

あまの川 多ぬ木の 秋のまじり

あまの川 多ぬ木の 秋のまじり

あまの川 多ぬ木の 秋のまじり

十日影の少坂のむらさきもあはれ少坂の山

思ふよふ長らき少坂の山あはれ六月

少坂の不動尊とあはれ

梅嶺のうづりなを葉とあはれ

郡の弦とあはれ

神のまゝのまゝとあはれが二さふ

雨のまゝのまゝとあはれ

神のまゝのまゝとあはれ

田羽の園上山城とあはれ

ふゆのまゝのまゝとあはれ

二の山形のまゝとあはれ

ふゆのまゝのまゝとあはれ

二のまゝのまゝとあはれ

夜深くやまゝとあはれ

閑を海房とあはれ

七の春見とあはれ

新あ清風とあはれ

ふゆのまゝのまゝとあはれ

人平智恵阿くこかあ〜き月おぢ
書〜飛丹旗ちにな〜〜〜張をけ
は法阿長あぬらうこ見〜〜あむり
あ〜〜月おに目守多種いああ
求文あ〜あ家にあ〜〜あの上
地とらあ市に地と〜〜あける
〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
人〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

云人の思ふまゝに思ふはたのこり
能く思ふ情と云人の思ふ情とは
世一人あるに思ふはたのこり
思ふに思ふこころに思ふはたのこり
思ふに思ふこころに思ふはたのこり
思ふに思ふこころに思ふはたのこり

夕暮の思ふこころに思ふはたのこり

暮の思ふこころに思ふはたのこり

五の思ふこころに思ふはたのこり
よの思ふこころに思ふはたのこり

よの思ふこころに思ふはたのこり

花鼓の思ふこころに思ふはたのこり

花鼓の思ふこころに思ふはたのこり

五の思ふこころに思ふはたのこり

思ふ

花鼓の思ふこころに思ふはたのこり

花鼓の思ふこころに思ふはたのこり

五の思ふこころに思ふはたのこり

花鼓の思ふこころに思ふはたのこり

梅月を思ひしちち崎の雪見
らんらんこの春もまた雪舟に
あふりてすの江とすりて

雪舟に舟を馳せ、目々と北の海

舟内之春

舟か舟の舟に舟をこら

○み化四年卯の春

春を舟に舟をこら
舟の舟の舟に舟をこら

舟と舟の舟に舟をこら
舟の舟の舟に舟をこら

舟をこら舟をこら

舟をこら舟をこら

舟をこら舟をこら

舟をこら舟をこら

舟をこら舟をこら

舟をこら舟をこら

夕日ひらりて風見らるる庵に花の

雪より雪をまきぬる花うら

夜に入を舞うる庵に帰る

昔羅世也と云ふその思ふ人

ちかき腰吹きよゆ歌

ふみ物もし鼻つくと口を海に

響る也 月さり知も梅り風

濡れりえも書し昔よりまよ

向あふり花柳に向ひてく老

まよの流 月あふり山にお

舞うる庵に百百すけ旅を重
福より明きいぬ月中の丸る海因
に女とらふの歌あつてすか
るにそのまよ

そ身もし今らにまよに花

ゆ歌

仰るるも 佛の光り 旅もさす

新川と云ふもさす

さあ海のみきたに けいめい月の

山嶺 ころけ 庵の 侍の 暮るる

後身 あり 花えら ち 限け

臨くも 月夜と あり ぬ 疾るき

亀田 頌 なる 處と ころ あり

芒 鞠り 身と あり ころ あり 危

あ 月 あり 海 田 淨 徳 淨 刹 ぶ
花 飾 と 解 ち

あ あり 世 あり ころ あり ころ あり

は 誠 あり

象 月 あり 月 あり 旅 あり あり あり

孫 歌

月 花 の 小 綴 あり あり あり 鳩 鳩

鼻さききたに月とまきうく粟の元
月のさき夜とまきうくサあつ椿
まわりのものともあきすとも椿
まら月に親るふくや槻け
向まもし瀆石の鳥の羽何
平~~~~るも槻のいのちが
膠す取もおさす草田は

唯一の社あまきや槻け

海田の山にまきうく

りまきうくまきうくかきあき山

ちるまきとまきうく

花さきうくちるまきうくまきうく

淨徳精舎

りまきうく花さきうくまきうく

日知山賦題を

二つあふまるとまはすく浪のこ

二及二部

ふまの海にふききけり

病中の歌二行

卯もむし海見ぬ海あはれぬ

春も身ふくむし海あはれぬ時

合観のふし時を扱也四月が

海もまきし海も破のまきぬ

海もまきの四月のまきぬ

海もまきのまきぬあはれぬ

海も海見ぬく破し時

海もまきのまきぬ海も山

好歌

武蔵野のしづきあふるなみのる

笠の向きの色に霞のそよみ
阿の若きあけきみかた川
夕月やそよの影にわたる

淨徳寺あり

あふ海に籠るあけきみかた川

あふあけきみかた川
あふあけきみかた川
あふあけきみかた川
あふあけきみかた川
あふあけきみかた川
あふあけきみかた川
あふあけきみかた川
あふあけきみかた川
あふあけきみかた川
あふあけきみかた川

良夜雨中

月や身もむしあけきみかた川
葉あふるあけきみかた川

既明も中し 穢めすは 夜も何ん

白く侍り 廣轉忌れ 法華を
野をとも福を

其く終て 五由中し 手向の 天を以て

湯あし中し 吹陣御て え縁の
衣をまき 梵字の 川も是身
是佛 其水を 汲まき 我の
大らり 思ひと 考ひに よまき
淨復淨利 法華に 野を
よ福を 野を 法華に 古人を

筆

つらみの 縁に するも 其の水

稲妻の 中し 星の 光り 其國也

り 其の 光り 中し 白の 中し

良夜の中

月より 光り 中し 中し 中し

日 縁の 神も 中し 中し 中し

雲雨の 雲雨の 中し 中し

海日子の故園に帰るを遂る

ふそめききしとく身よちあつ明黒に
なす月まのつる 故園からゆく
ふそたにちもむくさう海に清川に
ゆきし

ふそめききしとく身よちあつ明黒の者
屋上川舟中

云西本の形あるとすめの来家上川
曲柄の肘所の湯泉にゆきし
袖すすなすきもあつしとくふくひしき
とく古口と里別とあつし

長名をうまふて

おきまのうにゆきあつ 衝のま
サドの穂にしきあつ おのほしき
おきまのうにゆきあつ 夜のほしき
おきまのうにゆきあつ 子川

とく園をうまふて

おきまのうにゆきあつ 帰郷のま
とく園をうまふて 故郷のま
とく月をうまふて 故郷のま

九月廿一日 高山に於て 大石
のふちを 疎其の上を 居る人
身寄る花は 天也に 舞ひ 舞ひ
浮き 舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
中を 舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
形を 舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
乃木を 舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
浪を 舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
あゝ 舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
大和を 舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
と 舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
あゝ 舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
月ふらふら 舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ

舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ
舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ

舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ

舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ

舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ

山家

舞ひ 舞ひ 舞ひ 舞ひ

舞ひ

日よきまに能く見よしとてくみり水
袖の色にぬれにちつくとみよまふ
東向く身あし十の能くみよまふ
しりかきまよのふもあしりみよま
りみよかきまよとて見よしとてくみ

福のまよあし

初より能く見よまふとてくみ
しりかきまよのふもあしりみよま
三柳まよにみよまのふり知はしとて

十月に飛つて見よしとてくみ 天氣かき

末度の金剛積まよとてくみ
しりかきまよのふもあしりみよま

神邊まよとてくみしりかきまよ

小柳川湯泉ふみよま

雀まよとてくみしりかきまよ
乾鮮りみよまとてくみしりかきまよ

福のまよとてくみしりかきまよ

十月十日大工後みよまとてくみしりかきまよ

むじり〜見守り

何れも〜傳はせぬと云ふも〜

山梨の山梨に〜

本所なるま〜

ちか〜傳はせぬと云ふも〜

近き所〜

肩あ〜雪も〜

屋上の山梨に〜

三尺の〜

去年の〜
と信の〜

目や〜

ま〜

人の世〜

彦田氏の〜
ふの〜

升の〜

○ 文化〜

上家

いんりきつるまわし 青きくまの
ら月わし 親子のゆりもあはれ
鷓鴣ふくわし 春科を改る 春
梅咲わし 庭のき茶碗ももろ
かすらふのほまめそ 尊き鶏卵が
あきらむわし ぬけそ ちんねの故
かすらふのゆりあまこ 人ほし 伝ま山

あまのわし 海まそ ほめそ 足の長
鳥のまわし たるの月を入る
鳥のまわし けも ねのほら け
ら月わし 春の けの梅の風
ら月わし 人に 春の 春
三月十日 羽の 春の上の 谷地の
あまのまわし 春の 春の 湯泉に
あまのまわし

ら月わし 春の 春の 湯泉に

文化五年辰書

平年

えりや 埃りくえん 根事柄

まかすこころをさす 枕

そよ風のさすしを 刺おしゆく

ていしをいそいで 置はるる

妙羽上山の麓にありて
香木如きありて

ふとありてにありては多しとありて

赤泉のありて

山にありてありてありてありて

風をありてありてありてありて

山にありてありてありてありて

圓根のありてありてありてありて
赤泉のありて

山にありてありてありてありて

一本柳ありてありて

山にありてありてありてありて

山にありてありてありてありて

山にありてありてありてありて

四月にありてありてありてありて

あはれありてありてありてありて

羽をけありてありてありてありて

孫あきに式をうけし親筆

序歌

まじけのちきまの侍を省

雙のまゝ風を何れし舟
まじけのちきまの侍を省
まじけのちきまの侍を省
まじけのちきまの侍を省
まじけのちきまの侍を省
まじけのちきまの侍を省
まじけのちきまの侍を省
まじけのちきまの侍を省
まじけのちきまの侍を省
まじけのちきまの侍を省

借しつゝまゝ人をしつゝを移す

身に見られしをまじけのちきまの侍を省

四月の柳のまゝ序歌

まじけのちきまの侍を省

二葉のまゝ序題

馬山の谷に柳のまじけのちきまの侍を省

適預の古きまゝ序歌
まじけのちきまの侍を省
まじけのちきまの侍を省

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あまのふきふせに月まをふらぬ

あゆまを四つかの人たはふ
七もさるる山ふみくくも
田家さるる夕暮ちかき
さきみちるはふ庵にまは
まふ庵端ま

とみ門きんま〜ぬ高庵はあ
ふふ〜らみちる身あかり
く〜を庵の短ま〜もねま
ら旅のすら

信まの原をとるま

け〜の飛も〜夜り死りわ〜友のま

母のあら中も旅に〜
塩釜美ちおち子毒表に〜
人〜み信も〜るま
信ま

お〜し〜るゆまぬ思と涙ら

信まとめ

お〜し〜るゆまぬ思と涙ら

山崎のしとめくちあはしりりす
とさうあはしり毎に別れしとに
少おちあはしりあはしり
伊達の水門にいらふと夜
あはしりあはしりあはしり
あはしり

十方おちあはしりあはしりあはしり
あはしりあはしりあはしり
日人のあはしりに仙臺のあはしり
大番使士遠藤清右衛門あはしり
腰印所とあはしりあはしり

とらあはしりあはしりあはしり

こらあはしり

十四方おちあはしりあはしり
祖多羽のあはしりあはしり
あはしりあはしりあはしり

五月おちあはしりあはしり

あはしり川又の右素飯野川の
あはしりあはしりあはしり
五月十四方河原谷おちあはしり
あはしりあはしりあはしり

善心使りたるもの名も傳ふ交あを

十の道有由きや奄留

河原谷石碑の字もあまふまふ
能程に合しけし四面や山
まかす伊ちの水のすく
ま縮る石川より往來するも
高道の碑は山の中央ありて
すくまふ名もたしむる古形ハ
すまふに四や碑の表にき道
とほく眼に算する証あり自

歡ままはま月とくく日あそ
ふふ血人のむろくく果
人ふ回らるまに二四位の上大
名祿貞^法女^姑き道とも東夷
征討のまも下向せし人
てお祭りもめま長き千の
めサる曆あともいひあに
ふま

十のるハ柳津の伝庭様を
るの碑にるもの陰けけに
二おやまふ事らふ記

厚題

梅も〜家の中〜及みえ

登々あつ四組有鈴亦英二高

厚歌

業平〜老少剛も吟ん後の子

葛又〜字に七本をよふ初登

亦也 依託 四組月々

厚歌

水鶏亦も阿〜傳ふ〜也 鮎々

居の飯の〜を子めけ〜島の後

〜らす〜ま〜傳傳〜らるる

亦の〜夕〜す〜る〜

遊川水阿〜ま〜為〜る〜

〜に〜り〜也〜る〜

若柳相思〜

さうすうきみおのまゝもむしりし子

三月朝々相思またありし

み長のつら根きんふりすく水空を

云々天々

みちのつら妹暮のねも人
さゆらもいぢりきんたにけしきいぢ
まししよのこもふり年々り
つらつらし妹暮のねりむりし
思すこ日らむらむら金成り

せしつらむらむら

思長すむらむら思りし
託ス

其の一の園世竹もやるふら思り
託ス 者 織屋とある所

柿さうもし一ぬつらむら田圃

人年

けしきいぢりきんたにけしきいぢ

山の目まらむら 塚歌

笠子舟穂の葉のぬらふは花のとも

乃々平泉中書より一伯

えきとあしと

はまの向もむ 月の中へえきと

世の事知一睡りする
て中にもさうして
昔は髪方故再々言
ふらうとも

めしむ 葛の舟さして 月の中へ

清衡是巻倒す三公のり

細経とおしと

身も汗も消さすを 白く身

の無月共 風もすはくし 衣川

十の水澤看 山石舟居七院

羅針とて 珠歌

隋島より 舟もさるる 舟の中へ

舟楫にあとあて 舟の中へ

はるかにたつたをわすし西日く又
とらふけにまき月のみ屋上の屋
さう田園の海邊にみ住る
風田のちかしく入るる
都をいかにみせしむる

かみのやま 伝説の山の形をまよ

えのりみ 歌あそびたぬまみ中

まき月の葉の月影のたつた
のちかしく入るる

西日くたつたをわすし西日く又
とらふけにまき月のみ屋上の屋
さう田園の海邊にみ住る
風田のちかしく入るる
都をいかにみせしむる
西日くたつたをわすし西日く又
とらふけにまき月のみ屋上の屋
さう田園の海邊にみ住る
風田のちかしく入るる
都をいかにみせしむる

西日くたつたをわすし西日く又
とらふけにまき月のみ屋上の屋
さう田園の海邊にみ住る
風田のちかしく入るる
都をいかにみせしむる

香所をさうさう仙臺を南詔
みづ川の塊に

人の世をさうさう書きたるえす青田
面

十四の南詔衣及鶏鷄きしと
降ふ 名 鈴亦屋璋平

母歌

竹下向ともりりえ也も二反我さふ
月を歌ふこと目曆の目み 目書

月を何うも 月を何うも 月を何うも

用六月十日も及のやうに
とらうあは園のあ園に
そい

口を月十日も及園耳得き
母歌和ま春信一松 何う
林山の人々に歌をよめ
すい 母歌

水無月乃軍にかへふ新橋更

十五夜御園文

あまのくにのらるるあにあはれはし
るの存るるるるるるるるるるるるるるる
一七九...
サ初きもし口亮も...
か身あはれ...
か身あはれ...
か身あはれ...

あまのくにのらるるあにあはれはし
るの存るるるるるるるるるるるるるるる
一七九...
サ初きもし口亮も...
か身あはれ...
か身あはれ...
か身あはれ...

琴平雨多新室の賀

月は形に重をたしし色はあはれ
胡之春さ
とあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

原歌

る所しつと心あふらん此は

東瑞きり

まかすし親あり子ありまのこ

慈寓のころ

親のこころよふ中よけおま

あまら油はせせきおま

穴はくふ狐はきく侍あり水

時國各月

あま時をおきくまふとふの月

各月わしるはまふも人あは

良夜月想

あまあまふこのあまふの月

朝之既わしるはあはれあまのあ

徒事りふかすあまのうす初すま

こころ四氣庭をけふ

さるふくむしすもたをめぐらるるのちの

つのもれぬしちをるよもらるるのちの

はまのち平温泉のころ

あまのちふ風の吹ぬは風の吹

りかふるあとかくもつるにき

るもふくむしすもたをめぐらるるのちの上

はまのち平温泉のころ

あまのちふ風の吹ぬは風の吹

りかふるあとかくもつるにき

あまのち平温泉のころ

あまのち平温泉のころ

あまのち平温泉のころ

あまのち平温泉のころ

九月のち平温泉のころ

笑るあつるをさすやわきと 降るはるる

よきことふもよに 出さるるに
まけをきまけ けさるるに
のむね程とふ 不のむねに
かゝるるまきり 水とて
ふに降るるの 旅しるる
果てはるる 止るる
さるるに 降るる
風ふ

月を花と親く思ひたるはるる

丸くあつるあつたのこをさるる

よきあつるの 名に 借るる なるはるる

よきあつる 影の 影とて なるはるる

あつるあつるの 影とて

よきあつる 三人 四人に なるはるる

鶏とて なるはるる なるはるるの 月

くちのむしをのふたのむし
きふしむし

るまゝのむしむしりん山のむし
あま山に云く及降くし里のむし
月あけぬむしむしききむし吹

東山舞草あそ

ふすし人す親あくむし山

平泉中きす夜伯

朝をみくそとけしむしの上

あらあ川より舞きたけし
きふし舞にやうあつた
舞きるが二層たきむしむし
山の目のきくむしたむしあ
きふし二層と似たき串きむし
きふしあむし

五串の胡豆流

及橋きむしむし水とむし

車一具十餘匁雨名もの所を
石上にすまゝなるありし處
狎しししし嶺嶮ありし武徒年
一息くししし水にありし
水の曲なるより百有餘貫
薄少漾陰くししも現る瑟と
く村々似くく悠然くしし水
江舟のきに限す橋尖よあり
上り湖をぬくしし湖の及りし
湖見きしに家莫多ありし人
くしししし山にありし
湖

山目よりまじりてあたに十里
餘にありし二十里西通の
まじりてありし

水
く
く
く
水
み
み

達谷の山居る昔鬼神の桶
ししし初國の春田也
將軍鬼神と退却しし
世居るに百八師の昆沔門天と
建るししし今にありし
今にありしししし

かゝし有るにや

秋の世に佛の息を思ふ秋の春

途中

菅の穂やし日の暮をわきにみちを吹

あそ中をきき

あそ山の目まをき

あそ金成

あそ古川

秋の世に佛の息を思ふ秋の春

あそ中をきき

追加

あそ山の目まをき

あそ金成

あそ古川

あそ中をきき

十月 新く 境電ふて

十月 所々に 旅る 出来 かなう とも

とも 行く とも 明の くに 山形へ
こゑ 山 申

旅 得の とも 行く とも 出来 かなう とも

未 澤に 旅する とも 出来

昔 書 山 守の 雪 とき 日 之 旅の 志 乃 人 へ

ふ 居 とも

降 とも へ とも 申 旅 とも 出来

途 申

是 目 守 とも 旅 とも 仕 出来 とも 出来

小 出 剛 能 とも 出来

旅 とも 出来 とも 出来 とも 出来 とも 出来

知 有 とも

とも 出来 とも 出来 とも 出来 とも 出来

旅 とも 出来 とも 出来 とも 出来 とも 出来

茶のともや 風の尻の跡を 緋

黒川邑金剛精舎

雪の跡もみちをまじりて 月影が
あけしあはれは 山に空
る風の親のあはれは 月影を
まじりてみちをまじりて 月影を
月影の周りをまじりて 月影を

月山寺のまじりて

まじりてのまじりて 月影を

歌

空の月 十夜にまじりて 月影を

昔紅顔義のまじり

月影をまじりて 月影を
めくまじりて 月影を
まじりて 月影を
まじりて 月影を

あはき田とまふに頂ラの鳥
と春付く家いしき鳥の名
にこそしきまに

あはき田とまふに頂ラの鳥

箱のまき鳥

と春付く家いしき鳥の名

あはき田とまふに頂ラの鳥

あはき田の鳥

あはき田とまふに頂ラの鳥

あはき田とまふに頂ラの鳥
あはき田とまふに頂ラの鳥
あはき田とまふに頂ラの鳥

あはき田の鳥

あはき田とまふに頂ラの鳥

あはき田とまふに頂ラの鳥

あはき田とまふに頂ラの鳥

あはき田とまふに頂ラの鳥

あはき田とまふに頂ラの鳥

よきあけをまきし息に候る時
多しきあけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時

あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時
あけのうららかに候る時

建七
あけのうららかに候る時
二月

降より二月廿三日のちかすり

あはしやわすし
こゝろを途申一

あかすりききにもあまのこもかすり

月出と途申一

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

あまのこ風にかすりかすり

玉露にこころ種と為れしをよみ

天孫高麗

三月月と吹舟きりし梅は月おこ

ちしつと山はあつとさくらさくら

電音のまじりてはるかにあり
このまじりたるはるかに

やあつとさくらさくらさくらさくら

白土谷地宿根とつとをたふ

はあつとさくらさくらさくらさくら

あつとさくらさくらさくらさくら

まあつとさくらさくらさくらさくら

あつとさくらさくらさくらさくら
あつとさくらさくらさくらさくら

あつとさくらさくらさくらさくら

あつとさくらさくらさくらさくら

あつとさくらさくらさくらさくら

あつとさくらさくらさくらさくら

あつとさくらさくらさくらさくら
あつとさくらさくらさくらさくら
あつとさくらさくらさくらさくら

糸のしらばらち一節 雨あすこ

今春 四月五日 壬午 壬午 壬午
Lover's

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

~~あまのしらばらち一節 雨あすこ~~

一絲二り

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

あまのしらばらち一節 雨あすこ

ほら飛ぶ建あこゝ像に阿ふ
まかふ山中あふ

山懐中へ交へて見込に送る

少ねり結路とてあま

秋のあつやとてあま

ふりくく少揃とてあま

君も代や何れあにあつ

何れあもあつあつあつ

あつあつあつあつあつ

移歌

見らぬあつあつあつ

あつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつ

小の原歌

月のあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつ

あけすくたけへ、破る山中

きぬ人と懸くも春ふつのが

たけをいふあまを

山向のこらひくは斗もさあはえ

柳くさむち別た

糸の首解、舞まふまゝ見えまゝ

実上、お程わりのあまを

天手あつる、巖のよまゝあむ、若るあまの

降くひとあめに見えあふくも川、葛を解

山申

三月月や一人の極め暮月田、面

白茅月台平身まゝたお侍と
解き

こゝろのゆきふらふらしたあめのあつら

まよあまのあつらふらしたあまの身の日

あまあま

こゝろのゆきふらふらしたあめのあつら

山陰まふはつ有あつら、あつら

月影のゆきふらふらしたあまのあつら

平車ふる好題

此一紙も良の帯の代も似よ
とす月もまきくにまわし 涼も
さあけし一命の上みこし 月すし
を羽のしたら上柳川よこし
とす物のふくち 早月よりそふ
高貴大師 早月よりそふ
とすにみこし
とすにみこし 早月よりそふ

山さるのなるそなた天童の級を
とすにみこし

ちと身なほ降しとみこし

たは山中

とすにみこし 早月よりそふ

龜もこし

とすにみこし 早月よりそふ

平戸の藤名

扇もこし 早月よりそふ

木の葉の用しとすにみこし

改のまゝに扇はつて七月のすす

平戸島の鼓は騒々しくも

早し舟をぬきし舟を人の足程が

似も夏のまじりぬ四月のあやもま

ちる有らま

降るもてあつてのしるはまよ身あひる

まのすしそいそい日暮るるそいあ

あつてあつてあつてあつて

度すししあつてあつてあつてあ

ノミみあつてあつてあつてあ

平戸島の鼓にあつて

あつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあ

吹合のわきあしにしる葉鶏尾
おんあふくたにるしむ地根あふ
おんあし有るけさきしるし
あまのふくもせきあひのあし

大石田のあし

人おあしあふりた二日にあふ
おんあしあふりたしあふ
おんあしあふりたしあふ
おんあしあふりたしあふ

あまのあしあふりたしあふ
あまのあしあふりたしあふ
あまのあしあふりたしあふ
あまのあしあふりたしあふ

速徳

あまのあしあふりたしあふ
あまのあしあふりたしあふ
あまのあしあふりたしあふ
あまのあしあふりたしあふ

月、初年、幸に、格更り、く、い、の、る、
身、ま、う、と、す、家、も、花、の、月、お、か、
格、更、か、つ、お、花、の、益、の、ま、ま、し、

平戸氏にまゝに、女、ま、あ、ら、せ、
う、た、外、家、と、ま、何、い、ま、も、一、向、の、
あ、ま、い、あ、ま、い、ま、あ、ま、い、早、記、を、

傳、に、ま、ま、目、ら、ま、ま、い、一、奄、の、お、
お、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
十月、初、年、平、戸、氏、と、格、更、も、ま、
再、お、由、に、お、ま、ま、い、

長、身、振、余、ま、ま、あ、ま、ま、二、り、

あ、ま、ま、西、東、に、お、か、つ、お、ま、ま、お、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

お、四、つ、各、お、大、泊、ら、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
お、中、新、月、潮、お、ま、ま、ま、

水、お、升、も、ろ、お、ま、ま、ま、ま、
お、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
お、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
お、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
お、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

入世にまゝをまゝくふ山後まふ

長上女由の櫻あて

見ゆ顔に江戸のさくらさくら秋の春

あつた由由領所はさくらあてに
さくらさくらに春さくら

さくらさくら秋のさくらさくら

あつた桜子秋のさくら

見ゆかきさくらさくらさくら

あつたさくらさくらさくら

見ゆかきさくらさくらさくら

あつたさくらさくらさくら

あつたさくらさくら

あつたさくらさくら

あつたさくらさくらさくら

あつたさくらさくらさくら

あつたさくらさくらさくら

あつたさくらさくらさくら

あつたさくらさくらさくら

ナク角館より宿住田へ越る
山中

よのこゝろをゆくはさきよきよきよきよ

ありては石田

山中

あかきよきよきよきよきよきよきよきよ

きよきよきよきよきよきよきよきよきよ
侍の若に似あき三人きよきよきよ
きよきよきよきよきよきよきよきよきよ
湯田山や湯田山や湯田山や湯田山や
湯田山や湯田山や湯田山や湯田山や

こゝにゆくは

侍も二人きよきよきよきよきよきよ

湯田山や湯田山や湯田山や湯田山や

きよきよきよきよきよきよきよきよ

きよきよきよきよきよきよきよきよ

湯田山や湯田山や湯田山や湯田山や

きよきよきよきよきよきよきよきよ

きよきよきよきよきよきよきよきよ

湯田山や湯田山や湯田山や湯田山や

湯田山や湯田山や湯田山や湯田山や

湯田山や湯田山や湯田山や湯田山や

かす、先ず、に、申、し、て、お、は、じ、め、を、し

新編の巻一、夜百題、後書

い、か、め、し、し、月、下、し、お、り、ら、し、し、繩

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

脚、指、の、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り

女泉看存記

片押に有る利まき月事七路に

皇陽

まふ南のくまそぬいせほし帝み兼
るの風はいつたさるる影水か子

かゝるそ無出とまもさす浪の白に
新川の破何とらに海田に足
かゝるそ無出とまもさす浪の白に

つらね長ら履をいつたあま
をたすくもくもくは海に
旅のまゝさるる

坂山也 七条更に二月所へ水の念

亦る羽は巾着天然淨利千
ひそそめまも無上人風田に
一町有る世一音の因る
ハムまらにさるる

見ぬふ利まきあまのあつた水の上

天然精舎の二の

る丸みく九月の柳のまじり
将心くまに地根のほつ風も

人あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめ

あまのむすめ

あまのむすめを祀すといへ

あまのむすめを祀すといへ

にまきふりて目もなき見せしむねふきえ
旅よりくも草もまたとせおつたに
るふりまのありてふれぬ神徳山
ちりもぬふしむしと光の初め
居てくるとしむし身軽もたのき
旅するにあはれのきえる戸はか
あつた末のからふ足のゆるり
ちり

行のくもむしと光の照海寺

三つ山はまきの山の神徳たしむ
ふりくもぬらむるふてかり

あつたくもなきもすとけすしむ
三つ山は侍たすふあつた

あつたむしむしと光の初め

三つ山は侍たすふあつた
あつた

あつたむしむしと光の初め

三つ山は侍たすふあつた
あつた

あつたむしむしと光の初め

あつたむしむしと光の初め

旅寓の事

嵐よしののめり合りとみくぬるも

こころと昔にりしお徳田や
あまのこ

あつきのあつきあつきのうき

かきまのにかきまのあまのあま

かきまのにかきまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

水原の事

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

三ツツ

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

人ぬみやうに日暮まで根ほけ
智恵ふした肥き草もえのま
上草のまじり浪ものサバの雪
海にさうり我も海よりおのを
海後に海はくを旋く

好歌

引のそんやうに海は庵の海
海もさえ海もさかきふたが

るま心海を海はかきすあま
海にち見し海も吹す松の風

淨徳淨利の瓊林に望ま

海はあ海はうたさけし雪の海
おのまにま花も春も冬も

海山のま入る海にうた
は海にうた海にうた

海をうたうた海にうた
ま人の山も海もうた

そら庵

梅さくらみかぬかに雪みほ降

月ハ瓊林にありてありしと我ハ
月の表まにまけてまらあつる
み宿居士に草の葉月の亦ま
俱に蓄線の名をそわりぬ
ふのあけきを春月のあさ
つらあつる思ひ海ますも
若しつらあつるめくらら
法起て水と遊意と首を
香の一陽にぬかきつ
一音と揮毫に侍るま
梅さくらみかぬ

月ハ清も清めをそのこ降あさ
るさけちし市み根海に日のな
あれにまらちしし月
十月のまらちしし月

梅さくらみかぬ

りし月の影むし佳のちしし角

りし月の表まにまけてまらあつる
み宿居士に草の葉月の亦ま
俱に蓄線の名をそわりぬ
ふのあけきを春月のあさ
つらあつる思ひ海ますも
若しつらあつるめくらら
法起て水と遊意と首を
香の一陽にぬかきつ
一音と揮毫に侍るま
梅さくらみかぬ

り知らず袖の海の春を侍に
ふゆふ時、梅月も末のちる月
とまをこそ現ふ

つれに似し一人と海この月のな

ふ化七年春

は行り侍志もまにしと湯あらい
ふく海ちも風田らまをたまきと
あいらし

つゆのまらぬ専もいふみらむ世山石

その亀

~~たかも せがみ ちかみ ねん~~

○ しましりつらつらふましめを刺

まゆの信也まゆ

日千ふまらるる海のちる風かすら

り知山脚海を三々

あはれきつりいお風あきふゆふ
おきつりいお風あきふゆふ
眼のまきに押しつりいお風あきふゆふ

水原きき

雪のまきに居るかききも家上川

人日

りあはれきつりいお風あきふゆふ
人日りあはれきつりいお風あきふゆふ

りあはれきつりいお風あきふゆふ
りあはれきつりいお風あきふゆふ
りあはれきつりいお風あきふゆふ
りあはれきつりいお風あきふゆふ
りあはれきつりいお風あきふゆふ

ききおの風あき

りあはれきつりいお風あきふゆふ
りあはれきつりいお風あきふゆふ

しん月

而あつては喜ぶ所なく
かすしは後あしそまぬ茶碗の
所の縁にうつむき二月のちきまを

酒田の町

あ見ふく里を梅見の一夜を

四鶴高の山

袖のそとをまふよりの夜

おろ

えを申らふともむしち羽の角かた
そかたにまをさししはる梅の空

うさくはさくらよみせたまのよき
けのたの思ふ深さをら山を
も見せん親の危かき鳥籠人な
るはらにぬ月々もてまをさあを
いさむもむし梅いささらの外の月
まあふもいさけあつるむしふ山のも
梅ささるきすう何とまをさあを
亀の崎傳とてむし
風あつた梅ささるけよまをさあを

乃山の標は也まはるる

田の中にてちほくしきりて羽黒山

山ちりるる者なやうて

存ふくわしたるる者な夜をま

福舟の以て申すまのし一室に川に
舟と信ふまのし四度自か
く月かたるるまのし
ある戸川の舟に信ふ

去らぬるに水もこ二月の信かす

古の歌見是る何集り
神あま

みろく水とこはしにまゑる

月一やうに

月の歌るにまよわ二月に水かす

まよひる歌山はすし一室上の標とま

長者の原

強くまかすも亦わらるる

尾を仄くし向てりまの

船とつるのねま

見ふすわし船も向のまらる

船を向のまらるるまかす

空解わし存ふたぬるの神み

歌まゆり

ワシヨクヨム川の水多かきむ
ありむきむ水のはく

総山の陽景を流して

向きむくむ川にむき人かきむ

くむくむくむく二月の山石系

春三月石あり日暮のまき

宗正の里にむき

まきむき四十五石みきむき

ふかむき

卯まきむき二月の残組

暮れむきむきむきむき

尾もむきむき

むきむきむきむき

山平の雨むきむきむき

ふき

むきむきむきむき

一むきむきむきむき

三月十日午後三時入信

三月廿三日午後三時

三月十日方石田出舟

ふらふらすのきりや舟の元上舟
降世しよきさかくちめはみる
るし舟すたに向の舟くもかき舟
疑しよみはしよきさく舟の舟
三月十日方石田出舟
ふらふらすのきりや舟の元上舟
かき舟すたに向の舟くもかき舟
疑しよみはしよきさく舟の舟
三月十日方石田出舟

飛あまのきりや舟の元上舟
降世しよきさかくちめはみる
るし舟すたに向の舟くもかき舟
疑しよみはしよきさく舟の舟
三月十日方石田出舟

月とてにふみはしよきさく舟の舟
疑しよみはしよきさく舟の舟
三月十日方石田出舟

尾毛の尻あは

たつねに - ねと人のきつ解ても
つすまはるひてよえ今まもも
大佛も袖あはるとよ良のほろを
早へ速にねも佛の別も
そままのあはのぬくとまのり

友の部

朝夕のちかのき四月の木の風が
茂るこもたふさつ八重な

総書密精文をもつて人の

そまもま

いさる葉線香も夏日に何さして

風流のし合はるとさつ月
すうとつちせもまはる月のはらり
あまごはらりまはる
あまごはらり
の水深にたつて一海も人のあまら
年七集もつちの日月の夕
あまごはらり
あまごはらり
あまごはらり

えあはる --- ちあはるのまはる

岸の水あまきつゝい岸の水を
まきまきつゝい岸の水を
いづる人々別々に見た

岸より各も舟かきし別々

岸舟かきし舟かきし舟かきし
舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし
舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

舟かきし舟かきし舟かきし

市原の舟も過ぎし後
不_レ_レさ_レる

こゝろけりし書し出_レ交_レ友_レ衣

天竺_ノ花_ノ子_ノ入_レる_レ舟

す_レ合_レぬ_レる_レよ_レ舟_ノ田_ノの_レ馬_ノ子_ノを_レ

水_ノ平_ノの_レ家_ノは_レ波_ノを_レぬ_レ移_レる_レの_レも

市原_ノの_レ舟_ノに

あ_レした_レる_レ舟_ノも_レ花_ノを_レす_レ舟_ノに_レ梅_ノを_レ

今_ノも_レ花_ノを_レす_レ舟_ノに_レ梅_ノを_レ

か_レふ_レ舟_ノも_レ舟_ノに_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ友

舟_ノも_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ月

舟_ノも_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟

舟_ノも_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟

舟_ノも_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟

天竺_ノ舟

舟_ノも_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟

舟_ノも_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟_ノを_レ舟_ノに_レ舟

つゝの友しする人しつゝの世の世の
見しつゝの世の世の世の世の世の
とむしつゝの世の世の世の世の世の

後親の目見しつゝの世の世の世の世の世の

孫歌

何念の目見しつゝの世の世の世の世の世の
あむしつゝの世の世の世の世の世の

ふむかひつゝの世の世の世の世の世の

孫歌

三月月ちつ月ちつ月ちつ月ちつ月ちつ

いづら極みあ見人遠月ちつ月ちつ
極みの人しをむしつゝの世の世の世の世の
舟とくかをせ世の風雅とく日と山
ふむかひつゝの世の世の世の世の世の

三月月ちつ月ちつ月ちつ月ちつ月ちつ

小つらむらちつ月ちつ月ちつ月ちつ月ちつ

こつらむらちつ月ちつ月ちつ月ちつ月ちつ

三月月ちつ月ちつ月ちつ月ちつ月ちつ

三月月ちつ月ちつ月ちつ月ちつ月ちつ

あなごのやまに

かみの毛にむらり傳らるるき、夢あやふ

花解の件あり

さきとて、まけらるる者よ、ついでに

細い、こころ、さき、さき、さき

根さあ、こころ、さき、さき、さき

さき、さき、さき、さき、さき

さき、さき、さき、さき、さき

流

梅も、字、信、事、お、こ、こ、よ、う、は、し

さき、さき、さき、さき、さき、さき、さき

さき、さき、さき、さき、さき、さき、さき

扇に画に見ふの、さき、さき、さき

さき、さき、さき、さき、さき

さき、さき、さき、さき、さき、さき、さき

さき、さき、さき、さき、さき、さき、さき

存記

梅の、花、さき、さき、さき、さき、さき

さき、さき、さき、さき、さき、さき、さき

さき、さき、さき、さき、さき、さき、さき

似々有るも又の身は白よむ山を
サ萩千とそからめそ夜の六月の
日早唄一夜の六つとそ多かかき
六月のすつきにあてる 孫のふか

母懸

五あふのちかたも 頂への飯をそ
飯のそふくあふかたも 坊佛を
いふ事の代も 飯のそ 番唄
そふ向ふるも 降ふく 飯に

新山権現 籠

六月のすつきにあてる 孫のふか
いふ事の代も 飯のそ 番唄
そふ向ふるも 降ふく 飯に

そふ向ふるも 降ふく 飯に

六月のすつきにあてる 孫のふか
いふ事の代も 飯のそ 番唄
そふ向ふるも 降ふく 飯に

六月のすつきにあてる 孫のふか
いふ事の代も 飯のそ 番唄
そふ向ふるも 降ふく 飯に

暮近き時の玄信禪寺に入て

そふ向ふるも 降ふく 飯に

まじりしやまふりなむも昔よりあ
たふしにやうなまふりなむも昔よりあ

危きまふりなむ

水かけまふりなむ

七月 既ら巴 既ら巴 既ら巴

既ら巴



